

弘大とミルテル(株)が「データヘルス研究講座」

未病予測モデル開発へ

健康寿命延伸に活用

弘前大学(福田真作学長)と広島市に本社を置くベンチャー企業「ミルテル」(加藤俊也代表取締役社長)は、同大大学院医学研究科に共同研究講座「データヘルス研究講座」を開設した。同大COIが誇る岩木健康増進プロジェクトで得た健康ビッグデータと、老化度を調べることができ、疾患を早期に予測できる同社の「ミルテル検査」結果データを組み合わせて分析し、発病に至っていないが病気になるやすい状態である「未病」状態の解析を進める。最終的には、健康診断結果から算出できる未病予測モデルの開発を目指す。

(石田紅子)

同講座は1月1日付で開 回で16となった。設、設置期間は2024年12月31日までの予定。医学 とともに短くなる遺伝子の研究科の共同研究講座は今 一部テロメアを調べる「テ

ロメアテスト」(未病検査)と、がんなど疾患の早期予測をする「ミルテス」の総称。どちらも血液検査で調べる。テロメアは生物

学的老化の指標とされ、悪い生活習慣によって短くなる速度が上がるとされる。同社によると、県民のテロメアは実年齢より4、5歳分短い。全国平均より実

年齢との差が大きく、短命県である現状と関連付けられるという。研究では、同プロジェクトの健診に参加している弘前市岩木地区住民の血液検査を毎年行い、どういった生活習慣が危険因子になるのかや影響を及ぼす生活背景を明らかにする。これらのデータを分析することで、テロメアを計測せずとも健診で老化度を算出できるようにし、健康寿命の延伸に役立てたい考え。

講座の設置開設が29日に同大医学部で行われた。同社の加藤代表取締役社長は「研究を通じて病気になる可能性を示せば、3年間で社会実装をサービスとして提供できるようにしたい」と意気込みを語った。同大COIは国の研究開発支援事業に採択され、年度末で9年間の期間を終える。次の段階として「共創の場形成支援プログラム」(COIネクスト)の採択を目指すことから、福田学長は「COIネクスト採択に向けた強い追い風になるのでは」とこの研究講座から多くの研究成果、社会実装が実現することを願う」と述べた。



研究講座の看板を手にする福田学長(左から2人目)、加藤代表取締役社長(同3人目)ら